

坪井川における川まちづくりの 実践に関する報告

池田寛章¹・田中尚人²・本田泰寛³

¹学生員 熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1,
E-mail: 070d8806@st.kumamoto-u.ac.jp）

²正会員 博士（工学） 熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1,
E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp）

³正会員 博士（工学） 熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1,
E-mail: yhonda@kumamoto-u.ac.jp）

坪井川はかつて熊本市の都市形成、都市文化と大いに関係していたが、現在は都市化の影響などから魅力が認知されにくい状況にある。そこで坪井川沿川の歴史と景観を活かした川まちづくりを支援するため、市民参加型のワークショップ（以下、WS）を展開していく。活動の開始にあたり住民参加型まち歩きWSを行った。WSから、歴史と景観を繋ぐまち歩きの手法を提示し、WSの成果から景観調査に対する視座を検証し、フィードバックの手法を検討した。

キーワード: 坪井川, 川まちづくり, 景観

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

坪井川は、図-1の通り熊本中心市街地を流れており、近年城下町再考の機運を受け、先祖供養の「精霊流し」が復活し、川に灯籠を浮かべる「みずあかり」などのイベントが開かれ、行政とともに市民たちが身近な都市の水辺空間として、そのあるべき姿を模索している。この坪井川は、かつて熊本城の内堀や舟運路として機能し、熊本市の都市形成、都市文化と大いに関係していたが、現在は都市化の影響による空間変容、人々の水辺に対する態度変容などから、魅力が認知されにくい状況にある。

そこで坪井川沿川の歴史と景観を活かしたまちづくりを支援することを目的に、熊本大学政策創造研究教育センターの「市民参加によるサイエンスショップ型研究」助成を受け、「坪井川を活かした川まちづくり」を展開する。川まちづくりとは、水辺を核として、地域住民との協働で展開する、地域環境づくりと定義する。この取り組みの第一歩として、坪井川沿川の歴史と景観まちづくりを繋げるWSを行った際の手法、成果を報告する。

2. 熊本市中心市街地の都市形成の概要

本章では、都市と河川の関わり合いの歴史として、掘の築造、河川改修、水害、生活などの変遷を整理し、坪井川沿川の都市形成について考察した。



図-1 坪井川周辺の地図（1万分の1地形図を基に筆者作成）

(1) 都市形成に関する資料の整理

本研究で使用した資料は大まかに坪井川の改修についての資料と、写真から当時の様子がわかる資料の二種類である。

前者は熊本県が作成した「坪井川改修計画書」などの各時代の河川改修に関する資料である。また後者は「写真の先駆者富重利平作品集」などの現在では確認できない、改修前の坪井川の様子がわかるものである。

(2) 熊本市中心市街地の都市形成過程の整理

加藤清正が計画した城下町整備により現代の熊本の都市骨格が形成された。資料を整理した結果、坪井川と都市形成の流れには3つの時代区分を設定することができた。以下、その特徴を示す。

a) 加藤清正による坪井川の改修

加藤清正は1588年（天正16）に隈本へ入国し坪井川の大規模な改修を行った。その目的は、治水のための排水路、築城に必要な材料を運ぶ舟運路、交通のための水路、城の軍事的防御のための内堀、下流域の灌漑のための用水路が挙げられる¹⁾。これらを実現するため当時白川と合流していた坪井川を石塘と呼ばれる背割堤で分流した（図-2²⁾）。また「有明海から高橋を経由して城下に物資を運ぶ運河として（中略）川筋に面した古町や新町は商工業の町として栄えた³⁾」など、舟運で都市が発展した。写真-1⁴⁾は1887年（明治20）頃のもので、舟運の船着場がある家屋が坪井川のすぐ側に並び、地下室は舟の荷揚げ用に使われていた⁵⁾。また、写真-2⁶⁾は1877年（明治10）に西南戦争後の復旧のため建築材料を荷揚げした様子で、この頃までは輸送路として活用されていた。

清正是巧みに川除の技術を投入したとされるが、当時まだまだ地域住民は水害を受け入れて暮らしていたと考えられる。坪井川は水害の被害はあったものの、300年近く流路はほぼ当時のままであった。

b) 都市化に伴う坪井川の改修

1921年（大正10）熊本市は周辺の11町村と合併し長崎に次ぐ九州第二位の都市となり、1924年（大正13）には市電が開業し、近代化の道を歩み始める⁷⁾。それと同時に坪井川の水害は市街地の発展の障害とされ、その整備が検討され始めた。その改修の流れを表-1に示す。特に1922年（大正11）と翌年の水害は規模が大きく、これを契機に河川改修が計画された⁸⁾。この時石塘堰の流下能力の不足が問題となり、改築工事が1924年（大正13）から翌年にかけて行われた。しかし水門敷高と堰上げ水位を引き上げてしまったことで、わずかな洪水でも浸水被害が出るようになり、1929年（昭和4）と翌年の県議会において、坪井川の改修と支川井芹川の付け替え工事が計画された。1931年（昭和6）から五ヶ年に渡る井芹川の付け替え工事により坪井川の流量を調節したが、石塘堰はそのままにしたため坪井川の河床の堆積は続いた。その結果、1957年（昭和32年）「7.26水害」と呼ばれる死者・行方不明者36名、全壊流失家屋・半壊家屋329軒という大規模な水害が発生した⁹⁾。この4年前、1953年（昭和28）には白川で発生した「6.26水害」により坪井川に大量に土砂やヨナが流入し、その処理のため熊本城の古城堀端が埋め立てられた。



図-2 城下町の絵図（新熊本市史別編第1巻絵図・地図より転載、一部加筆）



写真-1 坪井川沿いの住宅
（写真の先駆者富重利平作品集より転載）



写真-2 1877年（明治10）の船着場（新・熊飽学より転載）

表-1 改修の流れ

西暦	改修に関する出来事
1922 (T11)	大洪水
1923 (T12)	
1924 (T13)	石塘堰改修
1925 (T14)	
1926 (S1)	洪水頻発
1927 (S2)	
1928 (S3)	県議会で坪井川の改修と井芹川の付け替え計画
1929 (S4)	
1930 (S5)	
1931 (S6)	井芹川の付け替え工事
1932 (S7)	
1933 (S8)	
1934 (S9)	
1935 (S10)	
∫	(この間河床の堆積)
1953 (S28)	6.26大水害
∫	
1957 (S32)	7.26大水害

c) 7.26水害後から現在の坪井川の改修

7.26水害を受け、翌1958年（昭和33）から坪井川中小河川改修事業が始まった¹⁰。計画は、石塘堰を現在地より下流に移設して水位を下げることで、石塘堰より上流では寺原町までの区間について河床の上昇を防ぎ、寺原より上流については浚渫を行うものであった。このため石塘堰よりかなり上流まで鉄矢板護岸とされた¹¹。このように流下能力の向上を図った一方、鉄矢板護岸によって写真-3¹²のように坪井川の景観が一変した。

最近では1980年（昭和55）、集中豪雨によって多数の浸水被害が出たことを受け¹³、坪井川激甚災害対策特別緊急事業によって1984年（昭和59）までの5年間で流下能力の向上を目的とした河川改修が施された。川幅の拡幅、川底の浚渫、橋梁の架替が実施され、その後写真-4の様に鋼矢板の上から化粧板が整備された。

(3) 地域住民の坪井川に対する意識の分析

本節では各時代の利用の違いから人々が坪井川にどのような意識を持っていたかを分析する。

a) 清正の改修後の人々の意識

加藤清正による坪井川の改修によって多くの恩恵もたらされた。特に治水の機能と舟運路の機能によって熊本の都市としての骨格が形成されることとなった。洪水を制御したことで安心して暮らせるまちとなったうえ、安定した舟運路となり熊本城の築城資材の運搬や城下町の商業の流通において役に立った。都市化する直前には写真-5¹⁴、写真-6¹⁵のように舟遊びなどが行われ、憩いの場として人々に認識されていた。この時代は熊本が都市として機能するため、坪井川が必要不可欠なものであったといえることができる。



写真-3 1985年（昭和60）の矢板護岸
写真-4 現在の化粧板



写真-5 1919年（大正8）の舟遊び（熊本100年より転載）
写真-6 大正頃の川遊び（明治大正昭和熊本より転載）

b) 近代化に伴う人々の意識

熊本が都市化する際に障害となったのが坪井川水系の洪水であり、いかに制御するかがこの時代の重要課題であった。およそ10年の間に二度改修がなされており、早急に対策をとる必要に迫られていたと考えられる。また都市化にあわせて坪井川へ生活排水も流入するようになった。人々の意識は都市の発展に向けられ、坪井川は都市化のための補助的な存在となっていたと考えられる。

c) 7.26水害後から現在にかけての人々の意識

7.26水害後、より高度な河川改修がなされた。現在では大きな洪水はほとんどなくなり、水質の改善や、熊本城沿いの景観、まちづくり活動での利用など坪井川に多様な機能を求める方向に人々の意識は向きつつある。

3. 川まちづくりに資する視座の提示

本章では、水辺の履歴を地域住民とともに調査し、川まちづくりのための知見を編集する手法、過程を提案し、その結果をとりまとめた。

(1) 対象地の史的考察から得た視座

2章の坪井川沿川の都市形成を理解した上で、以下の川まちづくり調査の視座を準備した。景観面からa) 風景、b) 橋、c) 護岸、親水面からd) アクセス、環境面からe) 水質・水量、f) 植生・動物、歴史面からg) 樹・地蔵の7種類である。視座とは、まちづくりに必要な空間的資源を、地域住民の体験と結びつけて拾い起こすためのコンセプトである。

(2) 川まち歩きにおける視座の編集

本節では地域住民を含めて行った調査における感想や意見などを図-3を利用しながら整理する。

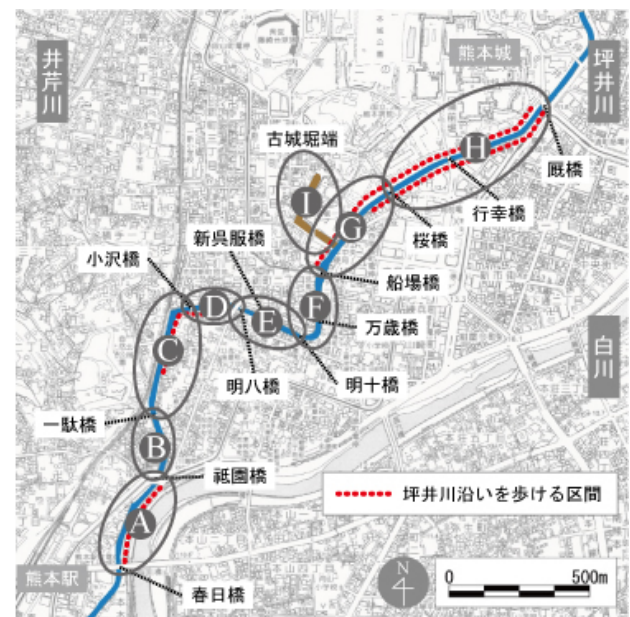


図-3 まち歩きの区分（1万分の1地形図を基に筆者作成）

以下に図-3で示したAからIまでのゾーンごとに調査の結果を記述する。

- A (春日橋～祇園橋) : 熊本駅に近く再開発の整備が行われる区間である。白川と並走していることが特徴。
- B (祇園橋～一駄橋) : 川へ近づくことができない区間である。水が汚かった。
- C (一駄橋～小沢橋) : 唯一矢板護岸が残っている区間である。川へ出られる家屋や空き地があるが、川沿いへのアクセスがほとんどない。
- D (小沢橋～明八橋) : 護岸に家庭菜園がつくられている。マンションや駐車場が多く面している。昔は泳いだり釣りをしていた。鯉が泳いでいた。
- E (明八橋～明十橋) : 流路が金峰山への山あてとなっている。民家や商店が多く面している。明八橋は城内への御門があったことから歴史的に重要である。
- F (明十橋～船場橋) : 富重写真所という歴史的な写真所がある。商店が多く面している。
- G (船場橋～桜橋) : ビルが多く坪井川沿いに面しているが公園も川沿いにある。
- H (桜橋～厩橋) : 表通りに近く、護岸と河川敷の芝生がきれい。熊本城とのつながりが強く感じられる。川の中のごみが目立った。
- I (古城堀端) : もとはお堀であったが埋め立てられて公園となった。住民の抜け道となっている。

(3) 川まちづくりに資する視座の分析

本節ではWSの結果から、川まちづくりに活かすための視座を分析する。

地域住民から多く意見が出たのが、歴史的な価値の高い場所であった。b)橋の項目に関して、歴史が長いものほど認知度も高く、景観面に加えて歴史的側面が強いことがわかった。逆に川へのアクセス性が低い区間では、意見がほとんど挙がらなかったことから、a)風景の評価のためにはd)アクセスが重要な要素であることがわかる。

2章の2節で述べた河川改修の中でc)護岸は変化してきたが、現在では様々な護岸が各区間に存在している。ゾーンCの矢板護岸を除いて、護岸に関して取り立てて意見が出なかったことから、各区間においてさほど意識されていないことが推察できる。むしろe)水質・水量、f)植生・動物の項目において、水量の増減を意識していたり、植生にごみが流れ着いていることを気にする意見が多く出た。

歴史的建造物によって景観に対する印象が変化していたが、今回の調査では視座に含めていなかった。またg)樹・地蔵に関しては景観調査に加えて詳細な歴史調査も必要となるので、ほぼ意見は出なかった。歴史的建造物を視座に加えることと併せて次回への反省点としたい。

4. おわりに

本章は小結として、今回のWSで得た成果と今後の展開、方向性を示す。

本研究では、坪井川沿川の都市形成から歴史と景観を主に考慮した川まちづくりの視座を設けた。歴史を活かしたまちづくりには、地域の歴史的環境や都市形成の履歴をかたちにする以外にも、人々の記憶や体験についても空間的な把握が必要不可欠である。水辺の歴史に基づき抽出された視座によって、城下町熊本の歴史が地域住民の視点ではどのように評価されているかを分析することができた。この評価をもとにWSを重ね、地域の問題点、課題、改善策を模索し、今後の川まちづくりへ役立てることを今後の方針とする。今回は川まちづくりの中間報告であり、今後数回のWSから視座の有用性を検証していく。

謝辞 : 本研究の調査においてWS市民メンバーの西嶋氏、荒井氏、村上氏、宮本氏、森氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表す。また熊本県土木部河川課の軸丸氏、桜町繁栄会の長濱会長にはヒアリング調査や資料の提供に快くご協力いただいた。深く感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 熊本日日新聞社編集局 : 新・熊飽学, 熊本日日新聞社, p209, 1990
- 2) 熊本市 : 新熊本市史別編第1巻絵図・地図, 熊本市, p31, 1991
- 3) 富田紘一 : 古写真に探る熊本城と城下町, 肥後上代文化研究会, p93, 1999
- 4) 荒木精之 : 写真の先駆者富重利平作品集, 富重利平作品集刊行会, p28, 1977
- 5) 桜町繁栄会会長の長濱健氏へ河川改修が行われる以前の坪井川の様子についてヒアリングを行った。長濱氏は昭和7年から桜町に住んでいる。
- 6) 前掲1), p213
- 7) 熊本日日新聞情報文化センター : 図説 熊本・わが街, 熊本日日新聞社, pp68-70, 1988
- 8) 熊本県 : 坪井川改修計画書, pp21-22, 1969.8
- 9) 前掲7), p33
- 10) 前掲7), p84
- 11) 園田頼考 : 肥後熊本の土木, 熊本日日新聞情報文化センター, p30, 1983
- 12) 熊本県都市河川室 : (河川激甚災害対策特別緊急事業の際の資料である), 1985
- 13) 熊本県熊本土木事務所激特対策課 : 坪井川・井芹川, 激特連絡協議会, p2, 1985
- 14) 熊本日日新聞情報文化センター : 写真集熊本100年, 熊本日日新聞社, p404, 1985
- 15) 鈴木喬 : ふるさとの思い出写真集明治大正昭和熊本, 国書刊行会, p142, 1980